ZOCALO 2019 4▸5

ZOCALO＝ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

文化的アイデンティティの表現としての椅子

企画展　ブラジル先住民の椅子
4月6日（土）〜5月19日（日）

シンプルな形態とつややかな表面。口吻から前肢にいたる優雅な曲線。丸くて愛嬌のある尾の造形。これは、ブラジルのシングー川上流域に住むメイナク族の作り手ウルフが制作したアリクイのかたちをした「椅子」です。「これは椅子なの？普通の木彫じゃないの？」と聞こえてきそうですが、実はこんなふうなギモンこそが、今回の展覧会コンセプトの「キモ」の部分を見事に言い当てているのです。

伝統という観点から考えてみましょう。メイナク族のように、現在のブラジルにあたる地域に古くから住む人々にとって、椅子（ベンチ）は共同体の高位の者である長老やシャーマンなどが用いるものでした。そのため椅子は、共同体のなかにある社会的な区分を指し示すシンボルになります。そして一般的にいって、椅子が制作されることは、共同体の伝統や独自の知識・信仰などが、世代を越えて継承されていくことを意味しています。

では、現代という観点からこうした椅子を眺めてみましょう。メイナク族は現在でも椅子を作り続けていますが、動物をモチーフとするこうした椅子の制作は、実は伝統への強いこだわりを必ずしも意味していません。椅子は、共同体における伝統的な用途のために作られるだけではなく、その造形的な質の高さに興味を抱く人々に販売されるために作られたりもしています。写真のアリクイの椅子がその一例なのですが、共同体の外部の人々に人気のモチーフは、伝統的なものより大きなサイズで作られるようになっているのです。「それって、スーベニア（土産もの）じゃないの？伝統でも現代アートでもないのでは？」というギモンも出てくるかもしれません。けれども、より実りが多いのは、ブラジルに住まう先住の人々によるこうした椅子の制作を、むしろ伝統とは異なる文化システム、例えば、政治性をはらんでいたり、文化的アイデンティティをモチーフにしたりする現代アートなどとの出会いをきっかけにした、現代文化への創造的な適応なのだと、視点を変えて考えてみることであるように思います。実際、現在を生きる人々は、アリクイのような動物彫刻の椅子を自分たちの文化的アイデンティティの表現であり、現代アートのひとつの潮流であると考えているのです。

これらの動物彫刻は、実際にすわることができるという意味で、確かに椅子として作られています。一方で、この椅子という媒体（メディア）には、先住の人々ごとの伝統、時流に応じた創造性の現れ、そしてそれに応じた文化的な意味の変容が歴史として刻印されています。こうした「メディアとしての椅子」という考えを念頭に置きながら、動物彫刻たる椅子を個別にじっくり眺めていると、動物たちのまなざしは、まるで私たちに「伝統とは？」「現代アートとは？」「文化的アイデンティティとは？」と問いかけているかのように見えてきます。自然を眺める確かなまなざしが生み出した、さまざまなかたちの動物彫刻の椅子たち。「動物のかたちをした椅子を作ることで、現代のブラジルの作り手たちは一体何を主張しようとしているのか」―そんな読み解きに、この展覧会でチャレンジしてみてほしいと思います。(T.S.)

ウルフ作《アリクイ》（メイナク）60×55×183㎝
アリクイは人気の高いモチーフのひとつで、伝統的なものより大きなサイズで作られるようになった。

《幾何文様》（アスリニ・ド・シングー）34×28×46㎝
より伝統的な形態の椅子。脚部分の装飾文様は、先住民の人々にとって生命の原理の象徴である。

レオナール・フジタ《横たわる裸婦と猫》

クーリエ報告

MOMAS コレクションを代表する作品のひとつ、レオナール・フジタの《横たわる裸婦と猫》が、パリ開催の展覧会「藤田嗣治：生涯の作品（1886-1968）」（パリ日本文化会館、2019 年1月 16 日〜3月 16 日）に出品されました。《横たわる裸婦と猫》は、フジタの代表的なモチーフである乳白色の肌の裸婦が、白い布の上にうつ伏せで寝そべる姿を描いた作品です。1913 年にパリへ渡ったフジタは、西洋美術の伝統から前衛まで幅広く研究した上で、西洋美術において重要なテーマである裸婦を、浮世絵や日本画の技法を取り入れた独自の画風で描き、高い評価を得ました。裸婦像は 1920 年代から 1930 年代はじめに集中的に制作され、本作はその終盤にあたる 1931 年に描かれました。黒く塗りつぶされた背景によって際立つ肌の清廉な美しさ、そして女性の膝裏あたりから顔をのぞかせる猫の愛らしい様子から、コレクションのなかでも人気の高い作品です。当館の大切な作品が無事に輸送され、安全な状態で展示されるように、今回クーリエ（輸送や展示作業に立ち会うために作品に随行する所蔵館側の担当者）として随行してきましたので、ここでご報告します。

フジタが活躍した地、パリで行われたこの展覧会は、日本、フランスから集められた３６点の作品を展観し、フジタの 60 年の画業を総括するというもので、日本からは２回に分けて作品が輸送されました。当館作品は第１便で送られ、私も作品とともに日本を出発しました。パリの空港に着くと、まずはカーゴターミナルエリアへ向かい、作品の到着を待ちます。１時間弱ほどで何重にも梱包されひとつにまとめられた複数のクレート（作品を収めた頑丈な木箱）が届けられました。その場で梱包をほどき、会場へ運ぶため、クレートをひとつずつトラックに積み込みます。フランスの美術品取扱業者の方がテキパキと危なげなく作業しますが、万が一落下などすることのないよう複数の学芸員で注意してチェックします。その後、会場で丸１日シーズニング（作品に対する急な温湿度の変化を避けるための慣らし期間）を終えたのちに開梱、点検、展示作業となります。日本で出発前に確認した状態から変化がないか、展示にあたり不安要素はないかを入念に点検します。細かな亀裂が増えていたり、あるいは広がっていたりしないかといった作品の状態だけではなく、額縁の状態なども、コンディションレポートや写真を参照しながら確認しました。展示用の吊金具や展示位置を確認し、展示作業を注視します。日本と比べて展示作業に用いる道具や、作品の扱い方に若干の違いはありますが、慎重に作業は進み、当館作品を含む一部の作品が整然と展示されていきました。当館の作品は、当初はプラン通りに展示されましたが、翌日に位置を変えることとなり、再び展示会場で作品の取り外し、展示作業を行いました。最終的に、《5人の裸婦》（東京国立近代美術館蔵）、《眠れる女》（公益財団法人平野政吉美術財団蔵）と同じ壁面に一列に並ぶことになりました。黒い背景の横たわる裸婦が向かい合うように展示された様子からは、当館でお見せする姿とはまた異なる雰囲気が感じられ、作品の底知れない魅力を感じました。

作品は３月中に返却され、今年度のコレクション展でも展示いたします。フランスでも多くの人を魅了した《横たわる裸婦と猫》をぜひ見にいらしてください。(M.K.)

展示作業の様子。壁の高さや他の作品とのバランスなど様々な点を考慮して展示位置が調整されていきます。

開梱作業の様子。ビスで留められていたふたを開けたところです。緩衝材・調湿保存剤などで厳重に守られた作品が入っています。

パリ日本文化会館外観。展示室のほかに茶室や講堂などを備えた総合的な文化施設です。

はみだしソカロ　はみだしソカロの投稿募集中です。ご意見などお寄せください。